## 第二十四章　黄金楽土

郷子と志乃は東山道武蔵路から東山道の本道に入るところで、奥州平泉と反対の上野方面に向かう傀儡の一行に別れをつげた。志乃は、頭目から傀儡の仲間に入るようにしつこく薦められたが、「あれはまぐれです」と言ってどうにか断った。

郷子と志乃が、傀儡の衣裳からつぼ装束に着替えて下野の足利駅までくると、吉次の一行はそこで二人を待っていてくれた。

「実は、あなた方を守るために秘かに身内の者に後をつけさせていたのですが、お田植え祭りでは、村をあげて随分派手に騒いで親子の対面を演出したそうじゃありませんか。それと、傀儡の群れに混じっての脱出劇は見事としか言いようがありませんね」

「みんな幼馴染が演出してくれたのです」

「いい友達を持って幸せですね。では、これから、白河ノ関を越えてみちのくに入り、わたしの屋敷に参りましょう。そこで、待っていれば遠からず、義経殿一行が現われでしょう」

吉次は、義経一行の動きをすでに察知しているような、自信ありげな様子だった。吉次ほどの人物であれば、義経一行を一年以上泳がせて、その間に守護・地頭による鎌倉の支配体制を全国的に確立し、そして最後に残った抵抗勢力である奥州藤原氏の懐に追い込むという大江広元の作戦などはすでにお見通しなのだろう。

吉次の屋敷は、平泉の玄関先ともいえる金成の東館というところにある。この屋敷は京の屋敷以上に大きく立派だった。吉次は、単に砂金を扱う商人として成功しているだけではなく、この都から遠く離れた蝦夷の地にあって、奥州藤原氏と朝廷や貴族たちとの間を繋ぐ役割を果たしている重要人物なのだった。

郷子たちの吉次の屋敷での生活は快適だった。この辺りでは新鮮な魚が豊富に取れ、美味い米や新鮮な野菜が収穫された。貴族が食べるような調理されたおいしい料理はなかったが、食材そのものの素朴な味がすばらしかった。ここでは、西国での飢饉が嘘のように人々の食卓が豊かだった。無口な人が多く、話す言葉も聞き取りづらかったが、総体的に素朴で粘り強く親切な人が多かった。

郷子は、屋敷の近くにある金田八幡神社に参詣して、義経の無事を祈ると、後は育児に専念した。義姫はみるみる成長して、はいはいしながら何かわからない言葉を発するようになった。

そんななかで、志乃がどこからか情報を仕入れてきては教えてくれた。

新宮十郎行家が、逃亡の末和泉国に潜伏するも地元民に密告され、北条時定によって捕えられ惨殺されたという。

頼朝に嫌われて、義経のもとに転がり込み、義経に頼朝追討の宣旨をとらせ、西国の旗揚げを試みた男も自らの策におぼれて死んでしまった。

鶴岡八幡宮の舞殿で、男舞を披露した静御前は、その後、子供が生まれるまで家臣に預けられていたが、祈りも空しく男子だったために、すぐに由比ガ浜に

捨てられてしまったという。
郷子は、静が友達として好きだったし、ある意味尊敬もしていた。
（あの情の厚い静は愛する義経の子を殺されてどれほど嘆き悲しんだだろう）
郷子は、静の心を思いやってやり場のない怒りに震えた。
義経一行が、山伏姿をして、能登のあたりを逃げているという情報もあった。稚児姿をした女性をつれているらしいとの噂だった。しかし、郷子は、それについては信じなかった。吉野山で静と別れている。その理由は、女性の足では、逃避行は無理だということと、山伏の入り込む山々は女人禁制だからという理由だった。それなのに、別の女性を連れているということは、信じられなかった。
（義経が稚児に化けているのではないだろうか）
郷子はそんな気がしてならない。
義経一行を、見かけたという情報が数多く巷に溢れているのに、捕まる様子はなかった。かれらは、間違いなく確実に一歩一歩奥州平泉に近づいてきている。
ある日、吉次が郷子の部屋に顔を出すと、平泉について次のような説明をしてくれた。
「古来白河ノ関から北の奥州は、都人によって蝦夷と呼ばれ未開の蛮地としてさげすまれてきました。言葉のなまりもひどく、そのため無口な人が多い。この地の人の気質は、都人に対する劣等感とそれに反発する感情が綯い交ぜになった複雑な性情からなっています。奥州藤原氏の三代にわたる北の都つくりは、このような性情によってもたらされた、ある意味では都を意識しながらも独自の仏国土づくりを目指した執念の結果だといえます。もちろん、この背景には、豊富な砂金の産出と駿馬の生産による財政的裏づけがあったことも事実です。
初代清衡公は、清原氏の親族間の争いでほとんど殺される寸前の絶望的な情況から、九死に一生を得て、最終的に奥州の統治者になりましたが、その戦で妻子一族を全て失いました。それで仏道に帰依し、藤原と改名して平泉に居を移すと関山に中尊寺と黄金でできた金色堂を創建しました。御本尊は金張りの阿弥陀如来です。その基になっているのは、ひとは死ねば西方にある極楽浄土に行き万人がみな平等に暮らしているという浄土思想です。蝦夷の人も都人も死ねばみな平等ということでしょう。
二代目の基衡公は、西方に毛越寺を建立し、浄土庭園を完成させました。浄土思想を一歩進め、死んでから極楽に行くのではなく、生きているうちに極楽を実現する現世浄土の思想です。毛越寺の一丈六尺の御本尊薬師如来は、京の雲慶に頼んで作ってもらったものですが、その製作のために支払った代価は、金百両、馬五十頭、絹二千反、海豹の皮六十枚など膨大なものでした。
いまの三代目の秀衡公は、京の平等院鳳凰堂を模して、それよりも規模の大きい無量光院を造営しました。無量光とは御本尊の阿弥陀如来が発する限りない知恵の光明のことです。無量光院の西側には、金鶏山があり、夕日が沈むときの美しさは例えようがありません。
ここに、奥州藤原氏の三代にわたる黄金楽土が完成し、いまや平安京につぐ

人口第二の北の都として栄華を誇っているのです。僧侶の数は、京をしのぐとさえいわれています。

ところで最近、頼朝は、秀衡公に無理難題を押し付けています。例えば、いま秀衡公は金や馬を朝廷に直接献上しているのですが、鎌倉を通して行えというのです。また、大仏の鍍金料金をさらに三万両払えといってきています。秀衡公は、ひたすら耐えていますが、いまや権勢を増してきた鎌倉勢が何時かは言いがかりをつけて、奥州藤原氏を攻めてくるだろうと考えています。義経殿を受け入れる事は、そのための口実を与える事になります。しかし、一方、義経殿を頭にしておくかぎり、鎌倉勢は、義経殿の戦闘遂行能力を知っているだけに絶対に攻めてこないと確信しているのです。義経殿は、両刃の剣ですが、秀衡公は義経殿の神がかり的な戦の能力と名声に賭けているのですよ」

「秀衡公の子供たちも同じ考えなのでしょうか」

「秀衡公の長男は、国衡殿ですが庶子であるために、次男の泰衡殿が正室の子として、嫡男とされています。義経殿が以前ここで世話になっていたときは、三男の忠衡殿とは仲良かったが、泰衡殿とはあまり相性が良くなかったように聞いています。しかし、秀衡公が生きている限り、問題はないでしょう」

年が代わって、まだ正月気分がさめやらぬある日、山伏姿に身を変えた伊勢義盛と亀井六郎が吉次屋敷に顔を出した。義経一行は、すでにこの近くまで来ているが、平泉に入る前にまず様子を調べに来たのだという。かれらは、郷子と義姫と志乃が居ることに驚くと同時に大変喜んだ。そして、吉次から秀衡公が、以前と同じように喜んで迎え入れるだろうと聞くと、すぐに帰っていった。

数日後、義経一行が吉次屋敷に到着した。義経のほか、弁慶、伊勢、亀井、片岡、鷲尾などの武士と下僕の喜三太など十名にも満たない人数である。

郷子は、義姫の手を引いて出迎えた。義姫は一歳半になっている。義経は、吉次に挨拶する間ももどかしく二人の方に真っ直ぐに近寄ってくると、満面の笑顔を見せながら言った。

「お前が既に来ていると聞いて心から嬉しかった。義姫も随分と大きくなったな」

「無事に着かれるのを毎日祈っておりました。義姫！、父上にご挨拶するのですよ」

郷子は、義姫に良く言い聞かせておいたが、実際に会うと何もいえないようだ。山伏姿の義経が、義姫を抱き上げると、義姫は困った顔をしている。

「初めて会ったのだから、父親といわれても戸惑うのも無理なかろう」

「人懐こい子ですから、すぐに慣れるとおもいますよ」

(あなたに似て)と郷子は思う。

その日から、義経と郷子は、義姫を挟んで、文字通り川の字になって寝たが、義姫はすぐに義経に懐いて、離れなくなった。

義経到着の知らせは、吉次から秀衡には、既に知らせてある。

秀衡からは、吉次屋敷ですこし待機してほしい、そのうち連絡するとの返答があったらしいが、その後、何の音沙汰もないまま半月が過ぎた。義経は、次第にあせりの様子を見せ始めた。良い時にはちやほやしてくれた人々が、没落すると手の

ひらを返すように冷たく当ってくるのには、慣れていたが、秀衡だけは信頼していたので、落胆も激しかった。義経が、吉次に相談すると、「すこしお待ちください」と言うだけだった。

そんなある日、百騎程の綺麗に武装した騎馬隊が突然吉次の屋敷に勢いよく進入してきた。義経たちが部屋に隠れて何事かと息を潜めていると、着飾った武士が大声を出した。

「九郎判官義経殿お久しぶりです。お迎えにまいりましたぞ」

それは、秀衡の三男忠衡だった。

義経一行は、秀衡と泰衡親子の私邸である伽羅御所に迎えられた。大広間では、藤原秀衡の隣に義経の席が設けられ、秀衡の子供たちは一段下がった場所に座らされている。その後に三百人以上の侍大将が集められて、歓迎式典の大宴会が催された。

その大宴会がおわると、秀衡は自ら義経一同をすこし離れた小高い山に導いた。そこには、新しく建造されたばかりの小ぶりではあるが瀟洒な館があった。持仏堂もついている。

「この衣川館に住んで下さい」と秀衡が言った。

この衣川館の見晴らしはすばらしく、平泉が一望できる。北方には、北上川の支流である衣川の清流を、東方には、政庁である柳之御所と無量光院を、南方には伽羅御所を見下ろす位置にある。このように平泉の人々から仰ぎ見るような位置に造られていることからも、秀衡が義経をいかに大切に考えているのか読み取れるのだった。

この衣川館には、義経、郷子、義姫の三人と侍女として志乃が住むことになった。義経の側近には、一段下がったところにある僧房が宿舎として与えられた。

郷子は、ある時は部屋でお茶と菓子をいただきながら、義経と義姫と一緒にたわいない雑談をしながら周りの美しい風景を眺めていたり、またある時は義経の吹く横笛に、郷子が最近覚えた琴で助奏したりしていると、今まで味わったことがないほどの幸福感に包まれた。義経の周りには、郷子を除き女性は一人もいなかった。義経もそんな生活に満足しているようだ。また、数日に一度は衣川館を降りて、歩けるようになった義姫を連れて中尊寺の金色堂にお参りしたり、毛越寺の浄土庭園を散歩したりした。郷子は、浄土庭園で親子水入らずで寛いでいると、まさに現世浄土とは、こういうものかと実感するのだった。

しかし、つらい知らせが入ってきた。父重頼と兄小太郎が謀反の恐れありと、頼朝によって惨殺されたのだ。

（父重頼は、頼朝が蛭ケ小島に流されていた二十年間毎月二回食料を送っていたのではなかったのか。頼朝の命令で義経に娘を嫁がせ岳父となった重頼に、義理の息子の誅殺を命じ、それを断ると謀反の恐れありとして惨殺する。人の世にこのような理不尽なことが許されていいものだろうか）

郷子が、これほど人を憎んだのは、生まれて始めてだった。

（義経は、奥州藤原氏の十七万騎を率いて、頼朝と闘う気はあるのだろうか）

しかし、郷子の見るところでは、この地の人の一般的な性格は板東の人の

荒々しい性格と比べるとわりと穏やかであるような気がする。初代清衡公の仏国土の思想が行き渡っているのかもしれない。だから、奥州十七万騎の軍兵を抱えているといわれても、それだけの迫力を感じない。頼朝の懸念にもかかわらず、この地から積極的に他国を攻めるつもりはないのだ。いわゆる専守防衛である。そのためには、義経という金看板が必要なのだろう。高館に義経を祭り上げて、攻めてきたらひどい目に合わすぞと表明しながら、自国を守るのである。秀衡は国衡、泰衡、忠衡などにもしきりに言い聞かせているようだ。
「義経という金看板を掲げておく限り鎌倉は攻めてこない。だが、もし、この金看板を失うようなことがあれば、この地は一気に灰燼に帰すだろう」
　ここでは、雪に閉ざされた時期が長いためか忍耐心が強く、気忙しい板東や都と比較すると一日がゆっくりと経過していく。 側近達も特にこれといった仕事もないから、高館に上がってきては衣川や周辺の山々の景色を見ながら日がな一日をのんびりと過ごしていく。
　山伏姿で到着した時の警戒心の塊のような緊迫した雰囲気が次第に薄れて、彼らの顔も穏やかになってきた。
　そんな日々が続いたある日、義経が郷子に言った。
「俺は、子供の頃にはつらい思いもたくさんした。だから、父を殺し、母を汚した清盛の平家を滅亡させ、源氏を再興して平家に代わって栄華を得ることだけを目標にして必死に修行した。その後兄の挙兵に参加して、幸い宇治川の戦い、一の谷の戦い、屋島の戦い、壇ノ浦の戦い全てに勝って、平家を滅亡させることが出来た。俺は、天下に名を知られるようになった。収入も使いきれないほどあり、あらゆる贅沢もした。女にも不自由しなかった。俺は、有頂天になっていて世界を手に入れたように思っていた。そして、俺ほど幸福なものはこの世にあるまいと信じていた。しかし、名声というものは陽炎のように儚いものだし、収入が使いきれないほどあっても必要なものは限られている。美味いものを食べても量は限られているし、次第に飽きが来る。百人の美しい女と寝ても、子を生した愛する一人の女との語らいには及ばない。こうして、俺とお前と娘と三人で平穏に暮らしていると、幸せと言うものは大それたものではなく、家族のささやかな日常の中にあるものだということが良く判った。浄土とはそういうものだと思うのだ」
（夫は、妻に愛の告白をしているのだ）
　郷子は、義経がしみじみと話すのを聞いて、本心嬉しかった。
（わたしは、義経が多くの女と睦まじくしても怒りも嫉妬も感じなかったと思っていた。だが、本心は般若のような苦悩と嫉妬と憤怒にさいなまされていたのではなかったのか。それは、こうして、二人きりで生活していて感じる真の心の平安と充足感が証明している。女の幸せというものは、自分が好きな人と暮らして幸せと思う以上に、好きな人が自分と一緒に暮らして幸せだと思ってくれることなのではないだろうか）

　二年目の冬に、慈父のように義経を愛し守ってきた秀衡公が死んだ。義経の嘆きは、激しかった。

「父義朝とは二歳で死に別れ。母とは、会うこともままならぬ。同腹の兄弟は離れ離れで顔も知らぬ。兄頼朝とは不和になっていまは追われる身だ。秀衡公を本当の父のように慕ってきたのに、これほど悲しい事はない」

秀衡は、死ぬ間際に、自分の若い妻を国衡に娶らせて、泰衡と兄弟心を合わせて義経を主君として仕えるようにと次のとおり遺言したという。

『秀衡が死んでも義経殿が、ここにいる限り鎌倉勢は攻めてこない。義経殿の恐さを知っているからだ。だから、頼朝は、お前達に義経殿を討て、討ったら常陸国を恩賞で与えるなどと言ってくるにちがいない。だが、その命令に決して応じてはならない。もし、義経殿が死ぬようなことがあれば、頼朝は、すぐに奥州に攻め入ってくるだろう。この遺言を兄弟みんなで守るのだ」

しかし、国衡も泰衡も秀衡の死後は一度も義経の前に姿を現さなかった。

衣川館では従来どおりの平穏な生活が続いていたが、そこを降りてゆくと秀衡のいた頃の手厚い歓迎振りは消えて、なぜかよそよそしい空気が感じられるのだった。もう客人でもなければ、仲間でもない、危難をもたらす疫病神のような存在なのだろうか。これは、義経と側近達も感じているようで、衣川館でも緊張感が増していた。

郷子は、義経に訊いてみた。

「秀衡公のいないいま、もうここを出たほうがいいのではないでしょうか」

「ここを出ても、もう行くところはないだろう。それに、俺はもう戦が厭になった。以前は、平家を滅亡させるという目標があった。だが、いまは自分の保身のために兄と戦っても、空しいと思うだけだ。それに俺が、直接殺したわけではないが、戦を通じて数千人は殺しているだろう。俺は、武士として生きるためには極楽浄土は望んでいないし、望んでもいかれないものだと思っていた。しかし、こうして、平穏に妻子と暮らしていると、俺も浄土に往って、三人で睦まじく暮らしたくなった。判ってもらえるだろうか」

（この人は、わたしと娘に一緒に死んでくれるかと訊いているのだ）

郷子は、お前達だけでも生き延びてくれという優しさを示されるよりも、一緒に死んでみんなで浄土で暮らしたいという義経の願いのほうが嬉しかった

「もちろんですわ。だってわたしたちは家族ですから」

衣川館にいるみんなの心が一つに纏まっていた。口には出さなかったが、もう来るべきものは判っていたし、みんな覚悟も出来ていた。これほどみんなの絆が深まった事はなかった。ただ、郷子は、志乃を説得しなければならなかった。

「志乃、わたしはあなたを姉のように慕ってきました。あなたに一つだけ頼みがあるのです。もうわたしは覚悟を決めましたが、頼朝の冷血だけは許すことが出来ません。あなたに、義経と父と兄の無念を晴らしてもらいたいのです」

「わたしもすでに覚悟を決めていましたのに、落ち延びろということでしょうか」

「わたしの最後のお願いです」

泰衡が、数百騎の手勢を連れて衣川館を攻めてきたとき、義経と郷子は義姫を連れて持仏堂に入っていった。

持仏堂の阿弥陀如来像の前で、三人で念仏を唱えた。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、・・・・・・・・

振り返ってみれば、十七歳で結婚してから、まだ五年しか経っていなかった。（でも、わたしは自分の人生を後悔していない。一人の男を心から愛し、その男の子供を授かった。これ以上の幸せがあるだろうか）

郷子は義姫に言った。

「すこし痛いかもしれないけれど、すこし我慢すれば、また三人で楽しく暮らせるのですから我慢するのですよ」

「母上、わかりました。じゃあ早く済ませてくださいな」

郷子は、義姫を抱きしめると目を瞑った。不思議と涙は出なかった。浄土庭園の池に架かった金色の橋を義経と義姫と三人で手を繋ぎながら歩いてゆくと、向こう岸で父河越太郎重頼と兄小太郎重房が手を振っているのが見えた。郷子は、大輪の花のような笑顔を浮かべた。

享年、義経三十一歳、郷子二十二歳、義姫四歳であった。

その後、数ヶ月のうちに奥州泰衡軍は、鎌倉軍に敗れて平泉の黄金楽土は壊滅した。

三年後に、後白河法皇が崩御した。

享年　四十六歳

同年、頼朝は、後鳥羽上皇によって征夷大将軍に任じられた。

翌年、範頼が謀反の恐れありとして、頼朝によって伊豆の修善寺に幽閉された。

それから、ほぼ六年後、頼朝が相模川の橋供養に臨んだ帰途、頼朝の乗っていた馬がどこからともなく飛んできた子供の矢に驚いて、突然前足を上げて立ち上がったために、頼朝はどっと地上に落馬してしたたか身体を打った。すぐ鎌倉へ運ばれたが、そのまま寝たきりとなり一ヵ月後に死亡した。

享年五十三歳だった。

完